

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.121

2022.6.30 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.121 目次

メガソーラー事業に対する野生動物と自然環境の保全活動	2-7
施設紹介ー酪農学園大学 野生動物医学センター	8-10
渡りをする蝶	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

メガソーラー事業に対する野生動物と自然環境の保全活動

WRV理事／高坂どうぶつ病院 院長 小山 正 人

最近、全国で太陽光発電や風力発電による自然環境破壊問題が、新聞で取り上げられるようになってきました。2012年に再エネの固定価格買取制度いわゆるFIT制度が施行されて以来、太陽光発電施設が全国に急速に増えました。私の住んでいる埼玉県比企郡でも、丘陵地の森林を伐採して行う太陽光発電施設が2018年頃から増えてきました。埼玉県中央部の比企丘陵は、ため池を使った谷津田での稲作が盛んな地域で、丘陵、森、水辺が揃い、埼玉県内でも屈指の自然環境を有する地域で、県内の他地域では見られなくなった多くの絶滅危惧種が生息しています。比企丘陵を含む東松山環境管理事務所管内には、1700件ほどのFIT認定を受けた太陽光発電事業があり、既に800件程が稼働しています。未稼働案件も900件ほどあり、森林伐採による生物多様性の低下が心配されています。今回は森林伐採を伴う野立て太陽光発電事業に対し、私たちが行ってきた活動をご紹介します。

太陽光発電の基本

- ①太陽光発電にスケールメリットはなく、大規模にしても発電効率はあがらない。
- ②2012年のFIT法施行で20年間固定価格で買い取られることになった。
- ③大規模にすればするほど利益が大きくなる。
- ④遠くの消費地に送電するとロスが大きくなる。
- ⑤太陽光パネルを建物の上に乗せて、自分で使う分を発電するのが正しい発電の仕方。
- ⑥電気の地産地消が本来の太陽光発電のあり方
- ⑦なぜ森林に設置するのか？
 - ・農地法よりも森林法の規制が緩い、4要件を満たせば、行政は林地開発許可を下ろさざるを得ない。
 - ・林地は価格が安い。

2018年12月2日鳩山町で開催した講演会「森林を脅かすメガソーラー発電」
(公財)日本自然保護協会自然保護室室長辻村千尋氏講演内容より引用

太陽光発電の基本的知識

メガソーラー講演会チラシ

講演会

森林を脅かすメガソーラー発電

自然を活かした地域づくり

—ナショナルトラストの視点から—

日時 12月2日(日)午後1時～3時

会場 鳩山町民会館 2階大会室

講師 辻村千尋氏 (公財)日本自然保護協会自然保護室室長

主催 埼玉県自然環境保全推進協議会、埼玉県自然環境学術研究会、埼玉県自然環境学術研究会、埼玉県自然環境学術研究会、埼玉県自然環境学術研究会

お問い合わせ先/NPO法人はとやま環境フォーラム
0448-227-3001 携帯090-2497-8513 (携帯)

1. 鳩山町での保全活動

2014年7月に発足した、私が代表を務める埼玉県生態系保護協会東松山・鳩山・滑川支部では、2015年7月から比企郡鳩山町熊井地区の100ヘクタールほどの「熊井の森」で、野鳥調査とアライグマの捕獲、現地処分を行っていました。2018年初め、その森にFIT認定されたメガソーラー計画が2か所あることが発覚しました。この森は90年代前半にゴルフ場になる予定でしたが、バブル崩壊で事業が頓挫し、20年以上放置されました。その後、私たちの調査でサンバ、ミゾゴイが生息していることが判明していました。そんな生物多様性豊かな森の開発計画に危機感を覚え、私たちは2018年12月2日、(公財)日本自然保護協会の辻村千尋さんを講師に、「森林を脅かすメガソーラー発電」をテーマに講演会を開催しました。2020年2月21日には、「熊井の森をはじめとする埼玉県内の重要な里山環境の保全と太陽光発電事業の進め方」という要望書を(公財)日本自然保護協会、(公財)日本野鳥の会、(公財)WWFジャパンの3団体から鳩山町長と埼玉県知事に提出していただき、県庁で行った記者会見では、埼玉県中央部の丘陵地帯は生物多様性の宝庫で保全すべきものであることを訴えました。朝日、読売、産経、毎日、東京、埼玉新聞の6社の記者が出席し、関心の高さが伺えました。

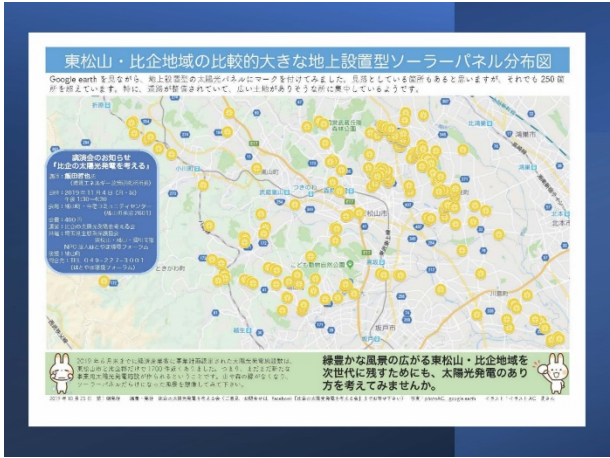


鳩山町熊井の森のサンバ成鳥
：電柱の上で餌を探している

2. 比企の太陽光発電を考える会発足

鳩山町は町域に占める太陽光発電所の面積割合が、近隣自治体の中で一番高いという事が議会の一般質問でわかっていました。そこで、町の太陽光発電施設設置ガイドラインの強化が必要と考え、2019年11月の鳩山町議会で、「鳩山町太陽光発電施設の設置に関する要綱を見直し住民が安心して暮らせる環境を求める請願」を行うことにしました。請願に添付する署名を集めるため、太陽光発電の問題点と比企郡の主なソーラー所在地を地図に落とし込んだチラシを作成し、新聞折り込みで全町配布しました。その頃には鳩山町だけでなく、近隣自治体でも里山を破壊して行う太陽光発電が目立ってきていました。近隣市町村住民との連携の必要性を感じ、2019年11月4日「比企の太陽光発電を考える」講演会を開催しました。第1部にNPO法人環境政策エネルギー研究所の飯田哲也さんを講師に講演会を行い、第2部として近隣自治体住民による意見交換会を行いました。各地から太陽光発電の問題事例の紹介があり、白熱した議論が行なわれ、開発事業者のひどさが伝わってきました。そして、今後もメーリングリストやSNSを通して情報交換を行なう事となり、正式に「比企の太陽光発電を考える会」という市民連絡会が発足しました。

埼玉県東松山・比企地域の地上設置型
ソーラーパネルの分布状況



3. 埼玉県最大のメガソーラー計画

会発足間もない頃の2019年12月、比企郡小川町の里山で、敷地面積86ヘクタール、発電出力約40メガワットという県内最大のメガソーラー計画が持ち上がりました。この事業は、90年代に造成途中で頓挫したプリムローズゴルフ倶楽部跡地を太陽光発電所にするというもので、計画の噂が飛び込んできた翌月の2021年1月に、環境影響評価手続きが始まりました。



小川町里山クラブ第二展望台(角山地区町有林内)から見たソーラーパネル予想図

4. 絶滅危惧種（サシバ、ミゾゴイ、ホトケドジョウ）の調査

2020年1月に環境影響評価調査計画書の縦覧が始まり、早速、調査計画書に目を通して見たところ、鳩山町での調査の経験から、この事業地にはサシバ、ミゾゴイが生息しているに違いない、希少種の保全対策が必ず問題になると思いました。しかし、ランクの高い絶滅危惧種は通常、調査が行われても情報は開示されません。そうすると私たちは保全上の問題点を指摘することができません。そこで、自分たちで調査をする必要があると考えま

した。50年以上に渡って埼玉県中央部の野鳥の調査研究活動を行ってきた鳥類学者の内田博さん（比企野生生物研究所）に、調査にあたってご相談させていただきました。そして、比企の太陽光発電を考える会の中から有志を集めて2020年4月からサシバの調査を開始したところ、2年連続3ペアの繁殖と巣立ちが確認できました。サシバの巣はいずれも事業地内か隣接するところにあり、巣から半径500メートルの高利用域が、事業地の3分の2を占めることがわかりました。2020年11月には小川町でサシバシンポジウムを開催し、2020年シーズンのサシバ調査の結果報告と、栃木県市貝町の遠藤孝一さん（NPO法人オオタカ保護基金代表）による基調講演を行いました。サシバの営巣密度日本一を誇る市貝町は、サシバをシンボルとした町づくりを行なっており、大変参考になるお話をお聞きすることができ、町民にサシバが生息していることの価値を知ってもらうきっかけにもなりました。



2020年12月、サシバシンポジウムにて（講師の遠藤孝一氏）

2021年1月には、事業予定地内すべての45本に渡る沢を探索し、ミゾゴイの古巣を4つ見つけることができました。ミゾゴイは3月下旬から4月上旬にかけて東南アジアから渡来し、繁殖前期の4月から5月にかけて、日没後2時間と夜明け前2時間に轉るという特徴があります。そのため、ミゾゴイ繁殖期の調査では、ICレコーダーによる録音調査が重要です。冬の間調査で見つけた四つの古巣の位置を元に、山の中の3か所にレコーダーを設置し、1週間ごとに電池交換とSDカードの回収を行ないました。2021年4月から始めたこの調査ですが、何といても日没後2時間、夜明け前2時間の計4時間の録音データを聞いて確認することが大変でした。さえずりと言っても小鳥のようにはっきりした音ではなく、よく聞かないとわからないこともありますので、1日4時間集中して聞く必要があるからです。その結果、調査メンバーの努力のおかげで、3か所ともミゾゴイのさえずりを確認することができました。

2020年8月、経産省で環境審査顧問会太陽電池部会が開催され、さいたま小川町メガソーラー事業の方法書の審査が行われました。その中で鳥類の専門家より、「ミゾゴイの古巣調査だけでミゾゴイは繁殖していないと考えられるとしているが、これは重大な問題だ。繁殖していないと断定するのは大変なことである。ミゾゴイ繁殖期にきちんと調査を行ない、繁殖しているのかいないのか確かめてください。」という指摘がありました。しかし、事業者はミゾゴイの繁殖を確かめないまま準備書手続きに入りました。そこで、私たちはとっておきの手としてミゾゴイが繁殖していることを確かめて、記者発表をすることを考えました。2021年6月12日に繁殖中の巣を見つけるため、現地の調査をすることになりました。当日は希少種調査メンバー6名と専門家の内田博さん、埼玉県生態系保護協会から2名、県の委託で絶滅危惧種の調査を請け負っている鳥類専門家2名の計10名で、録音調査で轉りが確認された3か所を中心に手分けして巣を探しました。現地は人の出入りのない里山なので、人の背丈ほどもある草をかき分けながら進むような場所もあり、調査は困難を極めました。しかも、冬と違い木の葉が生い茂っている状態なので、よく見ないと見逃してしまう可能性もあります。大変な調査でしたが、調査の中心を担っていた鈴木邦彦、鈴木治美夫妻が事業地の中心部で繁殖中のミゾゴイを発見してくれました。私自身巣で卵を抱えているミゾゴイを見たのは初めてだったので、本当に感動しました。調査メンバーも、大きな仕事を成し遂げた充実感と同時に安堵の気持ちがいっぱいだったようです。また、埼玉県絶滅危惧IA類のホトケドジョウに関しては、「都幾川のいきものたち」という両生類と魚類の図鑑を執筆された斉藤裕也氏（比企・奥武蔵陸水生物調査会会長）が担当し、見事に2箇所で見つかることを確認してくれました。



2021年6月、繁殖中のミゾゴイ



メガソーラー予定地に生息するホトケドジョウ



メガソーラー予定地で育つサシバ雛



巣立ち直後のサシバ雛

5. 環境影響評価準備書への対応

2021年4月には、ついに環境影響評価準備書縦覧が始まりました。2021年4月19日に小川町で開催された準備書説明会では、事業者が地元住民に説明会開催の案内をしていないのに、案内書をポスティングしたという嘘をついていたことがわかり、冒頭で50名以上いた出席者全員が退場するという前代未聞の事件が起きました。また、4月19日に準備書縦覧が始まり、20日に説明会というのも通常あり得ない説明会日程の設定であったなど、非常に不誠実な事業者でした。しかし、町行政は事業を歓迎しないとしつつも積極的な介入はありませんでした。

通常、猛禽類が確認された場合には2シーズンにわたる調査が必要ですが、事業者の都合により、1シーズンで十分データが取れたとして準備書が提出されました。翌年に準備書が提出されると思っていた私たちにとって、想定外でした。では、私たちは環境影響評価準備書に対して何ができるかを考えるために、全国各地の環境影響評価事例を集め、分析をしました。その結果、少しでも時間稼ぎをして調査を長引かせることにより、売電期間を短縮させることができると考えました。環境影響評価途中で事業廃止になった、長野県四賀ソーラー事業に対する市民運動が特に参考になりました。そして、環境大臣と知事に中止を含めた厳しい意見を準備書に対して出してもらうことを目標とし、「①とにかく地元住民意見書をたくさん出す。できれば800通以上。②関係町村長への働きかけ。③町内外の企業・団体からの意見提出。④公聴会に出席して意見を主張する。⑤新聞に載せて県民の関心を高め、世論を味方にする。」の5つを会のメンバーに呼びかけました。2021年5月に、小川町民全体向けと事業予定地の地元自治会向けの2回にわたり、希少種調査チームメンバーが準備書への意見の書き方研修会を開き、地元飯田地区向けの研修会では、50名以上が参加し会場に入りきらないほど盛況でした。その他、地産地消の再エネ普及活動を行っているNPO法人おがわ町自然エネルギーファームさんが、メガソーラーの問題点をわかりやすく説明したチラシを作って町内のお店に設置してもらったり、若手有機農業者の方が、以前の仕事を生かして自主的に意見書書き方マニュアルを作成してくれたりした結果、534通もの意見書が集まりました。6月の埼玉県主催の公聴会では26人が中止を求めて公述をしました。小川町長、ときがわ町長には、事業中止の意見を提出するよう要望書を住民から直接手渡しました。寄居町長へも地元住民による要望書が提出されました。さらに小川町の有機農家団体から、中止を求める意見書が町長へ提出されました。

6. 関係省庁への要望

2021年7月16日、伊藤岳参議院議員の協力で経産省、環境省、国交省、林野庁、資源エネルギー庁に要望書を提出しました。これは国会議員の要請に応じて、省庁の担当者が説明を行う国会レクチャーの中で行われました。本来は18名ほどの住民が出席する予定でしたが、緊急事態宣言中ということもあり、私と小川町の住民6名で参議院議員会館に伺い、土砂災害の恐れがあることや、希少生物の生息について環境影響評価準備書に問題があることを説明しました。この要望書には、私たちが依頼した専門家の意見書も添付することで、科学的な裏付けを与えることができました。遠藤孝一氏にはサシバ保全上の問題点、内田博氏にはサシバ、ハチクマの現地の生息状況と保全について、斉藤裕也氏にはホトケドジョウや両生類の保全についての意見をいただきました。加えて上田恵介氏（(公財)日本野鳥の会会長）には、現地調査を踏まえての鳥類学者としての見解について、鳥類学者の川上和人氏（森林総研）には、ミゾゴイの生態と保全についての意見書を書いていただきました。特に川上氏は、元環境省ミゾゴイ保護方策検討委員でしたので、環境省に与えた影響も大きかったと思います。



関係省庁への要望書の提出



2021年8月、希少種調査結果の記者発表

7. 希少種調査結果を記者発表

希少種調査の結果を最大限に活かすために、私と斉藤裕也氏、上田恵介氏の3名で、2021年8月25日に川越市内で記者発表を行いました。実際に現地にも何度か足を運んでいただいた上田恵介氏からは、鳥類生態学者としての知見に基づき、「ここで事業を行ってはいけない」という力強い言葉もいただいたことで、新聞社4社で記事が5回掲載され、県民に広く知ってもらうことが出来ました。

8. 県知事への要望、学会発表、ミゾゴイ学習会

2021年9月14日には、大野埼玉県知事に生態系保全の要望書を提出しました。生物多様性保全上重要な場所で林地開発許可をおろさないこと、資源エネ庁の事業計画策定ガイドライン遵守するよう事業者を指導すること、気候変動対策と生物多様性保全の両立、絶滅危惧種の保護対策を公的に検討するとともに、県民との意見交換の場を設けることなどを要望しました。その後も、9月19日に日本鳥学会2021年度大会での口頭発表、11月3日に第26回「野生生物と社会」学会岐阜大会ポスター発表、12月18日にバードリサーチ鳥類学大会2021で発表を行い、メガソーラーの問題や生息するサシバ・ミゾゴイのことを訴え、普及啓発に努めました。

2021年11月7日には、ミゾゴイに焦点を当てた講演会を小川町で開催しました。内田博さんからはミゾゴイの生態と貴重な映像資料をご紹介いただき、私からは自然環境から見た比企丘陵の特徴について、後藤真太郎先生（立正大学地球環境学部教授）からは、ため池による谷津田農法と比企丘陵について、衛星画像を交えながらお話いただきました。

9. 埼玉県知事から厳しい意見

11月7日(日) 午後1時~4時 小川町立図書館 2階視聴覚室 ※加賀無料

◆主催 比企の太陽光発電を考える会/小川支部 ◆共催 熊田教諭現地メガソーラーに反対する住民の会 ◆協力 遠ノ山(山)の会/熊田支部

比企丘陵一帯には、たけのこ産地や谷津田農法など、先人たちが築いてきた風景があります。その一方で、小川町にはサシバやミゾゴイなど絶滅危惧種の生息地が広がり、県内でも稀に見る豊かな生態系が維持されていることが分かってきました。今回は、町に生息する希少生物の生態と保全の現状やメガソーラーによる影響について、その保全策を探っていきます。

生物多様性の指標、ミゾゴイはなぜ私たちの里山に？ 後藤真太郎先生

講師：内田 博さん 日本野鳥の会 比企野生物研究所代表
講師：小山 正人さん 埼玉野鳥保護協会 熊田山・鳩山・鳩川支部会 NPO 法人 野鳥観察会 熊田支部 代表
講師：後藤 真太郎さん 立正大学地球環境学部 環境システム学科教授

(ア) ミゾゴイの生態と里山の関係 (イ) 小川町の位置と生態系の特徴 観察・記録の留意点
(ウ) 鳥類と生態系との関係 (エ) ミゾゴイの生態と保全の現状 (オ) 今後の保全活動の展望

(ア) GISで見える鳥類分布の特徴 (イ) 絶滅が生物多様性に及ぼす影響 (ウ) 絶滅の予防と保全のための行動計画 (エ) 絶滅 DNA 調査と今後の展望 (オ) 鳥の目撃・小川町の展望

◆資料をご用意しますので、事前にお申込みください。◆会場の人混みを防ぐため、事前申し込みをさせていただきます。◆当日、受付にて後編・手紙交換をお願いします。ご了承ください。比企の太陽光発電を考える会/小川支部 090-4423-4104(山田) net-ten@saikama.net.ne.jp

2021年11月、ミゾゴイ勉強会

2021年11月9日と12月10日の計2回、知事意見を左右する重要な答申を出すための「埼玉県環境影響評価技術審議会」が開催されました。ここで県が改めて鳥類の専門家にヒアリングを行うこと、新たに生態系の項目を設けて答申案に盛り込むこと、サシバ・ハチクマ・ホトケドジョウについても加筆を行うこと、郊外から持ち込む残土の調査も盛り込むことなどが決まりました。私も傍聴しましたが、ろくな調査もせずいい加減な準備書を作成し、地元住民に極めて不誠実な対応を続けてきた事業者は、専門の各委員からの厳しい指摘にしどろもどろになる場面もありました。改めてこの事業の強引さが浮き彫りになったこと、私たちが行った生物調査が大きく影響しているであろうことがわかり、思わず心の中でガッツポーズをしました。こうした審議会での意見もあり、12月27日に経済産業大臣に提出された知事意見は、「中止を含む見直しが検討されなければならない」という非常に厳しいものになりました。ここまで踏み込んだ意見は過去に例がなく、まず、目標の第一歩は達成されました。

1 0. 太陽光発電環境アセスで初の見直し

年が明け、2022年1月25日に環境大臣から経産相に出された意見も、「安全性の懸念や強い不信感が生じている」「地域の迷惑施設と見られる」等の言葉が並び、サシバやミゾゴイの生態系への影響の懸念が示され、事業の「抜本的な計画の見直し」を求めるといった厳しい意見でした。全国紙やテレビなどで大きく報道されましたが、太陽光発電事業で環境大臣が見直しを求めるのは初めてのことです。意見の中では、ミゾゴイの営巣地と周辺の改変を回避するよう事業計画の再検討を求め、またサシバやミゾゴイといった重要な鳥類への影響がないよう、繁殖期の工事を「低減」でも「代替」でもなく「回避」と記されています。事業者は2021年の時点で、ミゾゴイの調査を行う予定はありませんでした。私たちの繁殖確認調査が、こうした環境大臣の厳しい意見につながったと思います。

そして2022年2月22日には、知事と環境大臣の意見を受けた経産大臣が、環境保全措置ができていないと判断できないため、事業の抜本的な見直しを勧告するに至りました。こうして、現段階で目標としていた成果をあげることができました。この案件が全国的に有名になったことで、新聞社の取材が現在も定期的にあります。

1 1. 地域の自然環境を守るために

太陽光発電の電源比率が従来目標の2倍に引き上げられた今、里山がソーラーパネルに埋め尽くされる危険性は増しています。大切な自然を守るには、定期的に自分のフィールドの開発計画をチェックし、いち早く対処すること、普段から地元住民・自治体に情報提供を行い、共に対策に当たること、学会にも積極的に参加するなど専門家とのパイプをつくり、アセスの時など専門家と住民のつなぎ役となって、事業者や行政への対応に当たるのが重要だと思います。今回の件で私たちが行った一番大きな役割は、予定地が生物多様性に富んだ場所であるということの小川町民に伝えたことだと思います。それまで、ここの希少種に注目している町民はほとんどいませんでした。研究者とのつなぎ役や文献等の情報提供など、サシバ、ミゾゴイの調査支援を行いました。また、(公財)埼玉県生態系保護協会の助けを借りながら、要望書作成などを行い、校正にも協力しました。

比企の太陽光発電を考える会を作ったことで、近隣市町村を含めたいろんな人材に協力をいただき、反対運動が広がったと思います。住民を巻き込んだ運動が重要と改めて認識しました。

1 2. 最後に

知事、環境大臣の厳しい意見、経産大臣からの抜本的見直し勧告がありましたが、現在も事業者は調査継続中で諦めていません。私たちも引き続き今シーズンのミゾゴイ、サシバの調査を続けています。2022年6月9日には、林地開発許可を下さないよう、1862筆の署名を添えた要望書を大野知事に提出しました。要望書の半数以上は、予定地直下の自治会住民です。自治会のほぼ全員が署名をしてくれました。また、この運動を進めるにあたり、専門家や自然保護団体、議員、町や県職員など多くの方々のご協力をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

酪農学園大学野生動物医学センター (WAMC)

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類医動物学ユニット
野生動物医学センター 教授 浅川 満彦

序：

冒頭、貴協会・箕輪多津男 事務局長のお招きで、この場で書かせて頂くことを榮譽に感じていることを表したい。箕輪事務局長は獣医学科の施設で救護活動を継続しているのは、現在、酪農学園大学（以下、本学）野生動物医学センター（英名 Wild Animal Medical Center、以下、WAMC）だけなので、紹介をして欲しいと仰られた。光栄である。しかし、皮肉にも、その打診を受けた直後、WAMCでの救護活動が停止される動きになった。当初、あれもこれも書かせて頂きたいとワクワクしていたが、非常に落胆し、悲しみをこらえつつこの原稿に向かっている。

ところで、WAMCの付置から10年間の救護実績の概要については、既に本誌で5年前に披露させて頂いたばかりである（浅川，2017）。その後の救護実績についても、一昨年までについては林・浅川（2021）で総括され、これに続く最新情報も刊行済あるいは刊行中である（例えば浅川ら，2021；大杉ら，2022，印刷中など）。加えて、本誌で箕輪事務局長が書評頂いた拙著（浅川，2021ab）を一読されれば、WAMCの輪郭は容易に推し量ることができらう。



野生動物医学センター(WAMC)外観

そのようなことから、ここではWAMCで救護活動をする前の背景と本学での救護活動停止に到った経緯を紹介し、今後の方向性を省察することにした。中々、筆が進まなかったが、この顛末を残すことは、救護活動に軸足を置かれる皆様の何らかの糧になるかもしれない。もちろん、箕輪事務局長が意図される内容と異なり、心苦しいのではあるが・・・。

本学における救護活動の曙：

1988年12月、本学附属家畜病院（当時）は、北海道庁と（社）北海道獣医師会からの要請を受け、「野生傷病鳥獣受診動物病院」（以下、野生動物病院）を設置し、本学の外科学教員とその所属学生が献身的に対応された。当時の記録によると（三浦，1995；森，1995；Nakade et al., 2005）、交通事故、油汚染、鉛中毒などに罹患した野鳥が中心に搬入されていた。この体制は、後述する2004年4月、同大・附属家畜病院が動物病院（現・動物医療センター）として新設されるまで継続した。

なお、先に引用した論文に見える故・三浦氏であるが、本学公認サークル野生動物生態研究会の極めて熱心な部員であり、奇しくも、彼がこの報告を刊行した前年秋に浅川はこのサークルの副顧問に就任したので、彼の卒業後も、友誼を結ばせて頂いた。やはり、救護活動はこのような方が核に存在しないと、いくら箱があっても、継続は難しいと感じた。極めて惜しいことに、彼との交流を開始して十数年後、病没された。冥福をお祈りしたい。また、森氏は、現在、岐阜大学共同獣医学科分子病態学の教授として活躍され、さらに、中出教授は、本学で多くの人材を送り出し2022年3月定年退職された。浅川は非臨床系なので、全貌は把握不可能で、ごく一部ではあったものの、本学野生動物病院に関わった方々がいずれも秀でた方々であることは容易に想像出来る。

WAMCへの継承：

さて、その野生動物病院は、2004年の某月日、この新動物病院構内に付置されたWAMCに機能移転されることになる。野生動物救護に関わることは覚悟、能力、そして経験が必要であるが、浅川はいずれも具有していなかった。そのような者が、この活動に関わった経緯をごく簡単に説明する。まず、新動物病院であるが、本学理事会として全建設資金を全額自前で出す方針はなかった。そこで、本学大学院が受け皿となって、2003年度から開始された文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の競争予算

を得ることになり、その事業における建設資金の半額が動物病院新設に賄われた。そして、その事業計画では新動物病院の敷地内に「野生動物管理棟」（同省への届出名称）という建物があった。計画が進行するうちに、事業代表から浅川にその運営・運用を任されたが、それが救護に関わる直接的なきっかけとなった。

この建物は野生種のみならず、動物園水族館飼育種、アルパカやダチョウなどの特用家畜、エキゾチックペットなどを対象に、それらが保有する病原体・汚染物質のサンプリングを行い、多くの共同研究『特用家畜等を含む生産動物の感染症・寄生虫病防御対策とその基盤となる網羅的な病原体の把握』（2003年度から2017年度）に資することを目的に設置された。もちろん、野生動物病院の機能は予定外であった。そして、前述の共同研究を行うため、事業代表から「野生動物管理棟」の適切な運用名称を考案ように指示され、当時10年目を迎えた日本野生動物医学会から借り、「野生動物医学センター」を提案、熟慮の末、本学理事会で諒とされた。

以上のように、WAMCは野生動物病院ではなかったし、浅川も救護に無関心であったが。しかし、新動物病院の当時院長から、突然、野生動物病院の看板を手渡され、今後は、WAMCで傷病野生動物を受け入れて欲しいと打診された。新動物病院本館では、バイオリスクの関係上、野生種搬入は禁じられたのでということであった。WAMCの目的外使用となるので、病院長から事業代表には必ず伝えることを条件に受けた。以来、この看板はWAMC玄関に掲示された（浅川，2121aの図2-16）。しかし、落ち着いて考えると、野生動物病院は道・獣医師会など、外部から大学（動物病院）に正式に委嘱された事業であるので、傷病個体の受け入れ窓口は本館でやって欲しいと、代々の病院長と交渉したが、全てが不首尾となった。

このように中途半端な状況ではあったが、幸い、浅川のもとに集結する学生・院生は、故・三浦氏のように優秀で熱意のある方が多く、彼ら・彼女らに助けられ、野生動物病院の機能は2022年まで維持することが出来た。その間、浅川自身も日本野生動物医学会認定専門医の資格を得、何となく格好がついた。また、「野生動物管理棟」には、当初から、建設現場の仮設詰所などに使用されるいわゆる中古のスーパーハウスを改造した「バードケージ」が併置されていた。約300万円もしたが、事業におけるサンプリング対象の動物（鳥類ばかりではなく、アライグマなどの哺乳類も対象）が、生きたまま搬入された場合、一次的な係留施設として必須なものであった。もちろん、これが入院舎として転用することができたことも幸運であった。

本学における救護活動の停止：

そして、運命の2022年を迎える。今、そう、この紹介文を書いている今、本学では欧州獣医学教育機関協会（EAEVE）の国際認証を目指し、獣医学教育の質の保証と国際化に取り組んでいる。その取り組みの中で獣医学群（他大学の学部に対応）全体のバイオセキュリティの見直しを行い、WAMCにおいてもバイオセキュリティの強化が急務であると判断されてしまい、この施設改修や機能移転などの対策を検討することになった。その過程で、現在の飼育動物関連施設と病理解剖棟とに囲まれ、WAMCが運用されている「野生動物管理棟」で（浅川，2121aの図2-15）、傷病鳥獣救護の継続は、鳥インフルエンザをはじめとする人獣共通感染症の蔓延防止の観点から困難であるという。確かに、今年の北海道におけるこの感染症の蔓延は重要視されるものであるが・・・。

いずれにせよ、このような経緯で、野生動物病院の機能は停止となり、まず、2022年5月18日、前述の看板は、浅川から本学附属動物医療センターの大田寛センター長に返還することになった。これは、約34年間続いた本学における救護活動の停止を象徴した出来事であった。

今後に向けて：

浅川は救護活動に関しては、本誌をご覧になる多くの方々とは異なり、今でも消極的な考えを有している（たとえば、浅川，2021ab）。自然生態系の健康までも包含するワンヘルスという概念が獣医学・獣医療のほぼすべてを被う今、なおさらである。その一方、野生動物を看板にした専用施設を有する獣医大で、傷病野生個体を受け入れないことは、少なくとも教育・啓発上、大きな問題であるとも考えている。

繰り返すが、野生動物救護活動自体に、是々非々、様々な論議が継続している。たとえゴールが見えない論議ではあっても、学生が、日々、直に体験することで、生きた論議が可能となるのではないか。

もし、動物の立場になるのなら、野生動物には教育の場に参加・協力して頂いているというのが適切な表現になる。まさにそのような場でこそ、適切な教育が展開されるものと理解しているが、如何なものであろうか。そのような状況で、獣医大が撤退したら、一体、どこでこのような論議が行われるのだろうか。

ただ、こういった懸念はいくらでもできる。まず、早急に取り掛からないのならないのは（浅川の現役期間が残り僅かなので）、本学経営者へEAEVE国際認証とは影響のない場所に、野生動物病院機能を含む施設新設の働きかけであろう。しかし、孤軍奮闘では限界がある。どうか、ご支援を賜りたい。

謝辞および大田寛センター長からのお言葉：

本文を締めくくるにあたり、まず、本拙稿に関し、浅川の所属する医動物学ユニットの同僚・尾針由真助教からご一読後、客観的なコメントを頂いた。彼はこの4月に着任したばかりであるのだが、WAMCの「行く末」に関わるすべてのゴタゴタに巻き込まれてしまった。有能な研究者である彼に申し訳ない気持ちで一杯である。

次いで、野生動物病院の看板を受け取って頂いた本学附属動物医療センター・大田寛センター長（前述）からは、以下のようなお言葉を頂いた。謹んで掲載させて頂く。

まずは本原稿を執筆された浅川満彦先生に、長年にわたり本学における野生傷病鳥獣の救護活動に多大なる貢献をいただいたことを心より感謝申し上げます。浅川先生の前稿中にもございます通り、本学獣医学群ではEAEVEの認証取得を目指すにあたり、学群全体のバイオセイフティならびにバイオセキュリティの見直しを行い、その改善を進めております。野生動物医学センターにおいても、主に病原微生物による生物学的脅威に対してより適切に対応するための方策を検討しております。その過程で、今般、野生傷病鳥獣の救護の受入を停止する運びとなりましたが、より適切な環境で救護を再開するためには本学獣医学群ならびに附属動物医療センターにおいて多くの前向きな議論が必要となります。浅川先生ならびに本原稿の読者の皆様におかれましては、酪農大附属動物医療センターに対して引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

2022年5月25日

酪農学園大学附属動物医療センター センター長 大田寛

引用文献：

- 浅川満彦. 2017. 環境教育における野生動物救護活動が果たす役割. WRV ニュースレター, (100): 20-21.
- 浅川満彦. 2021a. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 東京大学出版会, 東京: 196 pp.
- 浅川満彦. 2021b. 野生動物の法獣医学-もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 東京: 254 pp.
- 浅川満彦, 吉野智生, 魚住大介. 2021. 栗沢町内の路上で傷病救護されたトビの収容原因について. 北獣会誌, 65: 64-66.
- 林 美穂, 浅川満彦. 2021. 酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護の記録(2015~2020年度). 北獣会誌, 65: 95-98.
- 三浦善裕. 1995. 酪農学園大学酪農学部獣医学科獣医外科第二教室に来院した傷病鳥獣の報告. (野生動物救護研究会 編)第3回・第4回野生動物救護研究会フォーラム報告集, エコ・ネットワーク, 札幌: 47-51.
- 森 崇. 1995. 油汚染鳥の治療の実際. (野生動物救護研究会 編)第3回・第4回野生動物救護研究会フォーラム報告集, エコ・ネットワーク, 札幌: 52-55.
- Nakade, T., Tomura, Y., Jin, K., Taniyama, H., Yamamoto, M., Kikkawa, A., Miyagi, K., Uchida, E., Asakawa, M., Mukai, T., Shirasawa, M. and Yamaguchi, M. 2005. Lead poisoning in whooper and tundra swans. J Wildl Dis 41: 253-256.
- 大杉祐生, 松倉未侑, 棚田敦司, 浅川満彦. 2022. ネズミ捕獲用粘着シートに誤捕獲されたシジュウカラの症例. 野生動物救護研究会会報<サポート>, 139: 印刷中.
- 大杉祐生, 岡田東彦, 華園 究, 牛山克巳, 山田智子, 齊藤さゆり, 浅川満彦. 2022. ナックリングを呈した国の天然記念物マガン (*Anser albifrons*) の救護事例. 北獣会誌, 66: 105-107.

渡りをする蝶

世界で最も有名な“渡りをする蝶”と言えば、マスコミを含め、これまで数多くのメディアで紹介されてきているオオカバマダラということになるでしょう。北はカナダや米国北部地域から、南はカリフォルニアやメキシコに至る、約4800kmにも及ぶ壮大な大移動を、しかも北上する際には3～4の世代を重ねながら体現していくその様は、まさに自然の神秘と言えるかもしれません。



アサギマダラ

日本には、このオオカバマダラと同じマダラチョウの仲間、やはり渡りをするアサギマダラが生息しています。この蝶に関しては、「アサギマダラの会」の方々を始めとする研究者などの手によるマーキングの手法を使った調査・研究等により、日本と中国、台湾、そして韓国との間で、渡りが行われていることが明らかにされてきました。特に、全長5～6cm程度の小さな体で、海の上



イチモンジセセリ

を越えていく様は実に見事と言うほかありません。私もアサギマダラについては、国内において何度か身近に観察した経験がありますが、ヒラヒラと優雅に飛ぶ姿からは、とても海を越えていく様は想像が付きませんでした。また、食草から毒成分としてのアルカロイドを取り込み、自らの身を護る術も含め、この蝶の生態には大いに惹きつけられるものがあるようです。

なお、他にも日本には、イチモンジセセリやウラナミシジミのように、全長2cm弱のさらに小さな体で渡りに近いような長距離移動を行う蝶が生息していますが、なぜそのような性質を有しているのか、リスクの観点からも大変興味深いところです。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者 (敬称略) (令和4年3月1日から令和4年5月31日)

○寄付金(一般) 2022.4.25 町田和子 7,000円

事務局日誌 2022.3.14～2022.6.18

=== 3月 ===

- | | |
|---|--------------|
| 14-19: 日本生態学会第69回大会 (オンライン開催) | 対応: 加藤 |
| 17: 日野市防災課・避難場所に関する現地確認 (水鳥救護研修センター) | 対応: 齊藤 |
| 19: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座 (追試験: 犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 20: 第59回獣疫学会学術集会 (オンライン開催) | 対応: 加藤 |
| 21: 2021年度一般公開国際シンポジウム「野生動物の健康」(オンライン開催) | 対応: 羽山、加藤 |
| 23: 神奈川県鳥獣総合対策協議会 (オンライン開催) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 23: 神奈川県傷病鳥獣保護連絡協議会 (オンライン開催) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 25: WRV ニュースレターNo.120 発行 | 対応: 小松、箕輪、齊藤 |
| 25: 飼養登録に関する打合せ (横浜市役所) [神奈川支部] | 出席: 皆川 |

26,27: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(実習:犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
28: 日野映像支援隊・ドラマ撮影のため駐車場利用(水鳥救護研修センター) 対応:齊藤
31: 令和3年度「水鳥救護研修・情報整備業務」報告書 提出(環境省) 対応:齊藤

=== 4月 ===

01: 令和4年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」スタート 対応:箕輪
02,03,07,09,10,14,17,21,24,29: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(実習:犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部]
対応:皆川
06: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ(犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
10: 令和4年度WRV総会(立川事務所) 対応:新妻、小松、大窪、中川、高橋、町田、小森、箕輪、齊藤
10: 令和4年度WRV東京都支部総会(立川事務所) 対応:新妻、小松、大窪、中川、高橋、小森、箕輪
16: (NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川県支部] 対応:皆川
26: (公社)東京都獣医師会南多摩支部総会(オンライン開催) 対応:小松、大窪、須田
28: わいわいサロン(オンライン) [神奈川県支部] 対応:皆川

=== 5月 ===

01,07,08,19,21,22,29: 神奈川県野生動物リハビリテーター更新講習会代替課題(犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
04: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ(犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
09: 伊藤達也衆議院議員セミナー「日本の未来を考える」(ホテルニューオータニ) 出席:小松
11: 小倉まさのぶ衆議院議員セミナー「プーチンの戦争から何を学ぶのか」(全国町村会館) 出席:小松
12: 令和3年度WRV事業報告書等提出(東京都庁・郵送) 対応:箕輪
12,13,26,27: 東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習(東京環境工科専門学校) [神奈川県支部] 対応:皆川
15: 第76回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」(オンライン開催) 対応:箕輪
19: 日本獣医師会オンラインセミナー「改正動物愛護管理法に係る犬猫のマクローアップ 装着等義務化に関する説明会」(WEB会議) 対応:小松
21: 日本コウノトリの会 2022年度第1回理事会(オンライン開催) 対応:箕輪
25: 小池百合子東京都知事・勉強会「東京の持続可能な成長を進める」(京王プラザホテル) 出席:小松

=== 6月 ===

01: 「野鳥発、クジラ・動物園経由、開業(動物病院)行き」掲載(日本野生動物医学会:Zoo and Wildlife News No.54) 執筆:玉井
05: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ(犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
11: 第80回日本野生動物医学会理事会(オンライン開催) 対応:羽山、加藤
11,18: 神奈川県野生動物リハビリテーター更新講習会代替課題(犬猫・野生動物救護センター) [神奈川県支部] 対応:皆川
12: (公社)東京都獣医師会第11回定時総会(都市センターホテル) 対応:新妻、小松、中川、高橋
14: 令和4年度第1回アライグマ・ハクビシン対策講習会(オンライン開催) 対応:加藤

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 121 2022.6.30 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 新妻 勲夫 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪 多津男
